

# 放送利用の大学公開講座

— 7年間の調査研究から —

放送教育開発センター・大学公開講座研究グループ

放送利用の大学公開講座（以後、放送公開講座と呼ぶ）は、放送教育開発センターが国立大学及び番組制作放送機関（放送局）と共同して、放送を利用して行なう大学教育の内容・方法等の研究開発、大学教育の開放の促進及び大学における教育方法の改善に資することを目的として実施している事業である。毎年放送公開講座の実施報告書が各大学で作成され、その数も既に20を越えている。そこで、これまで刊行された実施報告書をもとに、放送利用の大学公開講座の概要と、7年間に及ぶ実施経験から得られた知見を整理してみたい。

## I . 放送公開講座の概要

### (1) 歴史

放送利用による大学公開講座は、昭和51年に文部省が東北大学と広島大学に委嘱して開始された。昭和53年には、国立大学共同利用機関として設立された放送教育開発センターが、文部省にかわって放送公開講座を実施することになった。同年、金沢大学が加わり、昭和55年には、大阪大学と熊本大学、昭和58年からは北海道大学も参加することになった。従って、現時点（昭和59年2月）では、放送公開講座を実施している大学は下に示した6大学である。

北海道大学	(北海道大学放送教育委員会)
東北大学	(東北大学教育学部附属大学教育開放センター)
金沢大学	(金沢大学大学教育開放センター)
大阪大学	(大阪大学開放講座運営委員会)
広島大学	(広島大学放送教育実施委員会)

(2) 講座内容と実施方法

放送公開講座の内容は、実施大学の特性や地域性を生かして、大学の放送公開講座実施機関が決定する。表1にまとめてあるこれまでの講座の題名を見れば分るように、医療、教育、心理学、生活、文化に関する講座が多い。公開講座の性格から一年毎にテーマを変えているが、受講生は講座内容を継続させることを強く望んでいる。

放送公開講座の学習指導は、種としてラジオ番組とテレビ番組の講義によって行なわれる。番組は、財団法人・民間放送教育協会（民教協）を通じて、地元の民間放送局で制作され放送される。民教協でも、毎年放送公開講座の実施報告書を作成している。

ラジオとテレビによる講義（45分番組）は、毎週1回ずつ13回（ワン・クール）放送される。大半の講座が土曜日か日曜日に放送され、テレビは早

表1 放送公開講座の

	昭和51年度	昭和52年度	昭和53年度	昭和54年度
北海道大学				
東北大学	日本文化を考える(TV) 生命の科学(R)	自然環境の科学(TV) 地域の科学(R) 明日のエネルギー(TV) 世界観の探求(R)	家族関係と法律(R) 日本のなかの世界文化(TV) 食料(TV)	日本近代文学の形成と外国語(R) 青年期(R) 地震災害と市民生活(TV) がんの制圧をめざして(TV)
金沢大学			環境(TV) 性格の科学(R)	現代の子ども(R) ロック音楽(R) がんの知識(TV)
大阪大学				
広島大学	人間の探求(TV) 環境の構成(R)	微生物と人間(TV) 青少年の心理と行動(TV) 金属と文明(R) 社会の変化と人間関係(R)	日本国憲法(TV) 生物の進化を考える(TV) 方言と文化(R)	スポーツと生活(TV) 心の健康(TV) 人生とは何か(R)
熊本大学				

朝が多く、ラジオはゴールデン・アワー（午後8：00～8：45）の放送が多い。各年度の放送は10月に開始され、12月あるいは翌年の1月に終了する。放送終了時期が真冬になるため、寒冷地では、テレビ番組の早朝の放送は視聴の中断を招きやすいと言われている。再放送は行なわれない。

### (3) 受講生

受講生は、スクーリングや受信領域の関係から、大学所在地の県民に限定されているが、大阪大学だけは、大阪府以外の地域も受講対象地区に定めている。

各講座の定員は、スクーリングをはじめとする各種サービスを行うために、100～300名に限定している。この定員については、一般視聴者のみならず、大学関係者や担当放送局からも少な過ぎるのではないかという意見が出ている。大学が教室などの会場で開催している一般の公開講座でも、もっと多くの受講生を受入れている点や、放送の潜在的視聴者の数からすれば、100～300名というのは現実的ではないというわけである。しかしながら、

### 講座名一覧

昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度
			北海道の資源(TV) 現代米小説講読(R)
おくのはそ道(R) 発掘された古代史(TV) 生活の科学(TV)	「平家物語」の世界(R) 成人病(R) 古代史の世界(TV) 生命をひもとく(TV)	数学への招待(TV) 宇宙を探る(TV) 王朝の歌と人(R) 少年期(R)	万葉の世界(R) みちのくの村むら(TV) 新しい物質(TV)
高齢化社会(R) 心理学の基礎(R) 海科学(TV)	現代日本の文学の展開(R) 現代の社会病理(R) 加賀の伝統工芸(TV)	白山の生きものたち(TV) 現代家族法講話(R) 学校をみつめる(R)	医学的リハビリテーション(TV) 日本語を考える(R)
大阪の学問(R) 病気の原因をさぐる(TV)	生きる(R) 暮らしと機械の頭脳(TV)	明日のエネルギーを求めて(TV) 現代の暮らしと契約(R)	日本経済の見方(R) タンパク質(TV)
自然災害と生活(TV) たくましい子どもを育てる(R)	瀬戸内の歴史と文化(TV) 交通と生活(TV) 平和を研究する(R)	感情を育てる(TV) 瀬戸内の水産物と食生活(TV) 酒の百科(R)	「心」を育てる(TV) 家庭と医療(TV) 文学にあらわれた女性像(R)
生活の中の医療(TV) 文化と宗教(R)	現代の工学(TV) 家庭と教育(R)	熊本の自然(TV) 近代熊本の思想と文化(R)	薬の科学(TV) 熊本の文学(R)

理科系の講座の場合には、その定員に達しないことがあるので、定員の適正規模については一概に言えない。定員に達しない問題については、放送時間、受講生募集の広報活動にも問題があるとの指摘もなされている。

受講生の募集は、ポスター、パンフレット、地方自治体の広報し、新聞、放送等を通じて行っている。ポスターとパンフレットは、主に教育委員会、公民館、図書館に送付しており、放送については、ローカルの定時番組の中で紹介したり、またはスポット広告を流すこともある。広報活動は、放送公開講座の受講生増加だけでなく、社会的評価の点からも重要であるが、実施大学や担当放送局でもまだ不十分であるという声が高い。

各種広報手段の中で、新聞は放送のように一度流すと消えてしまうというものでなく、また情報が手元に残るものなので効果性が高いようである。昭和58年から甲南大学は独自の放送公開講座「甲南大学放送講座」を開始したが、その時の新聞広告は紙面の3分の2を占めていた（神戸新聞、1月1日）。それに比較すると、記事紹介のかたちをとる放送公開講座の新聞の広報の顕在性は極めて低いといわざるを得ない。

受講生になるためには、所定の用紙で申し込む。各講座とも原則としては、募集定員内で先着順に決定することになっているが、定員規定については弾力的に運営しているところが多い。大学によっては、講義内容のレベルから高等学校卒業またはそれと同等の学力を有するものという条件を付けているところもあるが、大学教育の開放という趣旨から、受講生の性別、年齢、学歴については制限しない場合が普通となっている。

従って受講生の学力のレベルが多様となり、どの学力レベルを基準として講義をするかが放送公開講座開始以来の大きな問題となっている。たとえば、医療関係の講座では、専門的知識を有する医師も受講生になるし、専門的知識の全くないいわば患者の立場の人も共に同じ講座の受講生となるのである。出演講師にとっては、専門家が視聴しているという事実の方が、心理的負担を増加させるようで、専門家の視聴に耐えるよう内容を詰めこみ過ぎたり、内容を高度にしてしまうことが多かったという反省が、番組終了後なされる場合が多い。

受講生になると、講座のテキストを実費購入し、放送による講義を視聴し、スクーリングに参加しなければならない。しかし、テキストだけの購入希望者も多く、さらに受講生にはならないが継続的な視聴をしている潜在的学習者もかなりいると番組の視聴率から予想される。時には、テレビ番組の録画テープやテキストの入手を他県から申し込んできた事例もあった。

講座の重複受講については、一部の大学を除いて許可されている。放送公開講座も回を重ねる毎に、受講生の顔ぶれが決まってくる傾向があり、公開の原則から問題を残している。

#### (4) 番組

番組はほとんど講師による講義形式がとられている。大学の実行上の手続きから、学部の特回りになる場合が多いため、毎回講師が毎回入れ代わることも珍しくない。このようにひとつの講座で出演講師が大勢になることに対して、放送局の番組制作者や受講生から批判が多く寄せられるため、出演講師の数を減少させようとする傾向が強くなっている。

番組出演に不慣れな講師にとっては、45分間を中断なしに録画（録音）どりするのは、非常に緊張を強いものである。完パケと呼ばれるこのような録画（録音）の方法が、放送番組の教授法を規制しているのという批判も出演講師から出ている。一時に全部収録するのではなく、場面ごとに編集するなどしてリラックスしてやれる方法を求める声も多い。一方、番組担当のPDからは、出演講師との打合せの機会が持てないことや、大学教官の放送番組制作への無理解による問題点が指摘されている。

番組制作の円滑化をはかるため、放送局の制作担当者が規格段階から参加するケースも増加している。大学と放送局が共同作業すること自体に、「大学の開放」や「地域との連携」という点で意義を認めている関係者もいる。

放送局との共同作業によって、大学の授業を放送に置き換えたようなトーキングヘッド形式の番組から、次第にテレビやラジオの特性を生かした番組づくりの努力がなされるようになってきている。放送公開講座が開始したばかりの頃には、受講生から講義方法を批判されると、講師側からは、「テレ

ビタレントと同一視するな」とか「目線や話し方といった外面上の批判は的外れ」というような反論が出ていた。現在では、アナウンサーやアシスタントの起用、学習者の参加、休憩の導入、対談、ロケーション撮影等の様々な工夫がなされるようになってきているし、番組改善のための提案が講師サイドからも出るようになってきている。講座の題名を例にとっても、大学の授業題目のように学問領域の名称をそのまま付けるのではなく、学習者の関心を引くような題名が考えられるようになってきている。このように、放送公開講座は、この事業にかかわった大学教官に大学教育の教授法を見直す契機を与える副次的効果があったようである。

放送公開講座では、放送番組以外の補助教材としてテキストを作成している。放送番組はテキストを持たない人も視聴するので、テキストが手元になくとも理解できるように作られている。そのため、テキストに記載されていることをそのまま番組でなぞることになってしまうことも少なくなかった。そうすると、テキストを所有している受講生には、講師が番組でテキストを読んでいるという印象を与えてしまうことになり、不評であった。受講生からすると、番組とテキストは相互補完的であってほしいということである。テキストの内容と完全に同じでなくとも、番組が自己完結的ならば、テキストを持っていない視聴者にも番組を楽しんでもらうことはできるので、ある程度テキストから離れた番組も作られるようになってきている。番組とテキストの相互補完性と、放送の公共性は相容れないわけではないようである。

#### (5) テキスト

テキストを補助教材と呼んでいることから分るように、放送公開講座では放送番組の講義が中心とされており、テキストは番組による学習を補助するものと位置付けられていた。しかし、現在では放送番組と同等にテキストも重要であるとの認識から、テキストの開発にも力が注がれるようになってきている。

放送番組がそれだけで理解できるものとして制作されているように、テキストも独立した読み物として執筆されている。番組もテキストも独立したも

のとして作成されて、なおかつ双方の相互補完性を考えないで関連だけを重視すると、番組とテキストの内容がどうしても完全に重複してしまう。

テキストは高等学校卒業程度の学力で理解できる平易なものを原則としているが、印刷物はいつまでも残るため、講師はテキストというよりは学術論文に類するものを執筆してしまうケースも少なくなかった。内容を充実させ学問的水準を維持しようとするあまり、そのことを学習の促進より優先させ、専門家向きの著書とはいっても、成人学習者のためのテキストとはいいたくないものになってしまうケースもないわけではなかった。毎年、テキストのみの購入を希望する者もかなりいるが、印刷部数の関係上、その要望に答えることができないでいる。しかし、出版社と提携して一般図書として市販する試みも増えてきている。

大学教官は放送番組よりもテキストの作成についての知識の方が豊富だし、経験も積んでいるので、学習を促進させる工夫がなされたテキストが徐々に作成されるようになってきている。

#### (6) スクーリング

講師による講義内容の補足や、講義内容についての討議、演習及び質疑応答を行ない、あわせて受講者間のコミュニケーションの機会をつくるため、スクーリング（面接指導）が行なわれる。実施大学の構内施設が主な会場となるが、遠隔地に在住する受講生の便宜をはかるため、学外の施設を会場として行なっているところもある。

スクーリングの回数は大学によって異なるが、開講式と閉会式を兼ねたスクーリングを含めて4回のところが多い。スクーリングの出席率は回を追うごとに低下する傾向があり、これはスクーリングの開催時期とも関係していると指摘されている。放送公開講座の開始が10月であるため、開講期間がなにかと忙しい年末と正月にかかってしまう。さらに、寒冷地では積雪の時期にあたってしまう。

スクーリングの指導方法は、単に講義による補講や、講師と受講生の質疑応答だけでなく、実験室での実験・実習、見学、バスを使った視察等も行な

われるようになってきている。会場における質疑応答の場合、特定の受講生だけが質問したり、身の上相談のようになってしまうことが多々あるので、前以て質問事項を提出させる方法をとっているところもある。出演講師が私用でスクーリングに出席せず、代理のスクーリング講師をたてるということも以前はあったが、受講生の強い要請によってそのようなことはほとんどなくなりつつある。

#### (7) 通信指導

放送公開講座の開始当初は、受講生に学習達成度を認識させ、疑問に答えるために通信指導を実施していた。通信指導が客観テストの形式をとっていたため、受講生には試験をしているようにとられ、講師の方でも、指導というよりは試験のように評点を付けただけで返送するケースが少なくなかった。一度通信指導に応じなかった受講生は、再び通信指導に応じるということはないので、受講生からの返送率は回を重ねるごとに低下する。

通信指導も目的どおりに正しく運用されれば学習を促進するが、一度でも返送しないと、それがきっかけとなって受講生に脱落感を生じさせ、放送公開講座による学習そのものを放棄させる結果になりかねない。

受講生の5分の1にも満たない返送率、実施に要する繁雑な手間、その効果性についての疑問から、昭和56年度には、すべての大学で通信指導の実施をみあわせることになってしまった。そのかわり、スクーリングの充実や学習者からのフィードバックを受ける通信指導に代わるシステムを導入するように各大学とも努力している。

#### (8) 再視聴センターと図書館

番組を見落としたり、再度視聴したい受講生のために、大学構内または社会教育施設などに再視聴センターが設けられている。受講生は指定の日時に再視聴センターで、番組を視聴することができる。大学構内にある再視聴センターの利用者はあまり多くないが、社会教育施設に設置された場合の利用率は学内にある場合よりもかなり高く、継続利用者も少なくない。ラジオ番



組については以前からダビングの希望者が多かったが、VCRの普及にともないテレビ番組のダビングを申し出てくるケースも出てくるようになった。これらの要望に対し、学習の観点からすれば応じるべきであるが、著作権上の問題から、このような要望にどう対処していくべきか今後の課題として残っている。

広島大学では、毎年受講生に対して、放送公開講座の開講期間中、大学図書館を解放している。

### (9) 最終試験と終了書

最終試験も通信指導同様に、昭和56年度には行なわれなくなった。受講生は公開講座で試験をするということに抵抗があるようで、受講したいが試験があるのならば受講生にならないという事態も実際にあったようだ。試験があることを承知で受講生になった者でも、試験を受けたがらないようで、一番よく集まった時でも全受講生の半数であった。

試験を実施していた頃の調査によると、番組視聴の継続やスクーリングへの出席などの学習活動は、最終試験の成績に影響を与えていなかった。唯一の例外は、テキストをよく呼んでいる受講生ほど成績が良かったことである。一方、受講生の属性は成績と深く関係しており、年齢が低く、学歴が高く、専門職（例、教師、医師）に就いている受講生の成績が良いという傾向が出ている。最終試験は全廃になったものの、放送公開講座で学習がどの程度達成できたかについて知るために、最終試験の代りに自己評価による理解度調査を実施する大学が増えている。

スクーリングへの参加状況などを考慮して、各大学とも終了書を交付している。

## II . アンケート調査の方法と結果

### (1) 方法

受講生に対して、毎年、放送公開講座に関するアンケート調査を実施して

いる。最初から共通の調査項目を使用することになっていたが、大学によって語句に若干の違いがあった。昭和54年度からほぼ同一の調査項目を用いるようになってきている。

調査は講座が終了する12月中旬から2月にかけて実施される。閉講式に調査票を配布し、会場で記入させその場で回収するか、前もって調査票を郵送しておき閉講式で回収するという方法を取り、閉講式に参加しなかった受講生については郵送法による調査を行なっているところが多い。あるいは全受講生に郵送法で調査しているところもある。回収率は、毎年5割前後である。

## (2) 結果

毎年の調査結果を比較検討してみても最も興味深い点は、結果の一貫性である。大学が異なっても、年度が違っても、驚くほど類似した結果になっており、毎年出される報告書には、まったくといっていいほど同じ数字が並んでいる。なおかつ、放送公開講座の中だけで結果が一貫しているのではなく、放送教育開発センターがテレビ朝日を通じて関東地区に放送している大学実験番組のアンケート調査結果とも似通ったものとなっている。このように、一貫した結果となる理由としては、次ぎのような事柄が考えられる。

i. 放送公開講座の画一化：たとえば、毎年同じような構成の講座であるため、年度が変わっても同じ結果となる。

ii. 放送教育に対して受講生が抱いているイメージの画一化：これまでの蓄積から、学習者が放送による教育に期待するものが決まっていて、そのイメージが反映した結果となり、そのイメージが変わらないかぎり結果も変わらない。

iii. 調査項目や調査方法の不備：調査項目の感度が低かったりして、調査の項目や方法自体に問題があって、いつも同じ結果となってしまう。

結果の不変性が、これらの何れかひとつの理由によるものではなく、(i)と(ii)の複合した理由によるものと考えるのが妥当であろう。(iii)も幾分かは関係している可能性がある。たとえば、調査項目の中に番

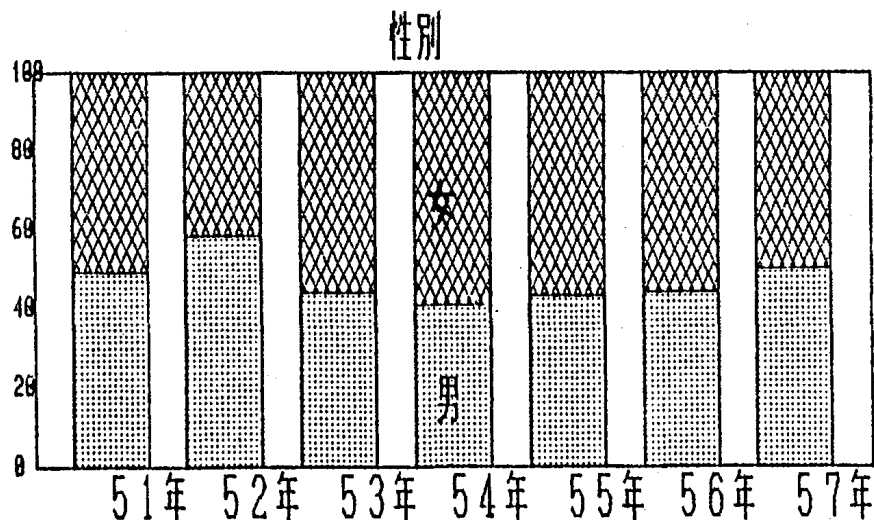
組制作技法に関するものが多く含まれているが、制作技法は各回の番組毎に変わることも少なくないため、13回の全番組を評価することになっている調査項目で、制作技法を評価するのには無理があったかもしれない。

もうひとつこれまでの結果から興味ある点としては、年長者の放送公開講座の評価がすべての項目について非常に高いということである。

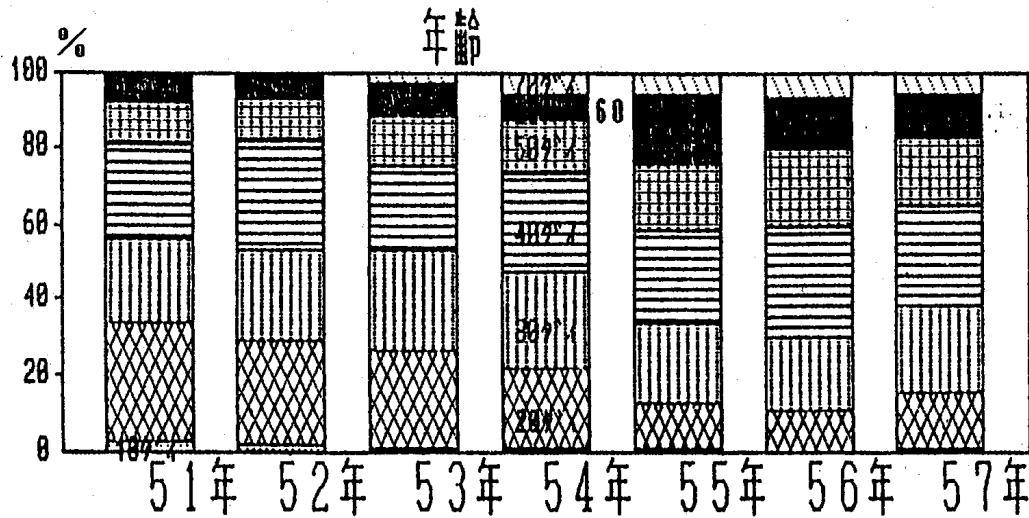
これまでのアンケート調査から得られた主要な結果は以下のとおりであるが、これらの結果を直ちに一般化することは危険である。たとえば、番組の制作技法として番組の途中で休憩を入れるのは受講生に不評であるが、この結果から、直ちに休憩を取り止めなければならないということではない。要は休憩時に何をやるかが問題であって、これまでの休憩の運用の仕方が悪かったのかもしれない。従って、休憩時に行なっていたことを改善する必要があるということだけを、これまでのアンケート調査結果は示しているのである。

図表には概数を示してあるので、各大学ごとのデータについては各大学の報告書に掲載されているものを参照していただきたい。また年次ごとの全体傾向については放送教育開発センターの報告書にまとめてある。

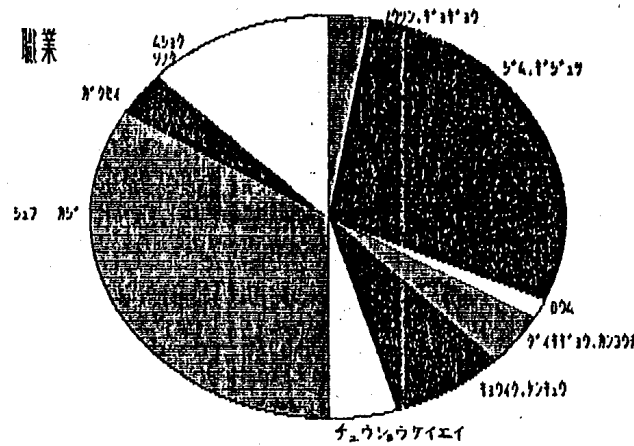
1) 受講生の性別：男女ほぼ同数であるが、自然科学系の講座では男性の割合が多く、人文系や日常生活に関する講座では女性の受講生が多くなる。自然科学系の講座は、男性が多くなるというよりは、女性が激減するといった方が正しい。



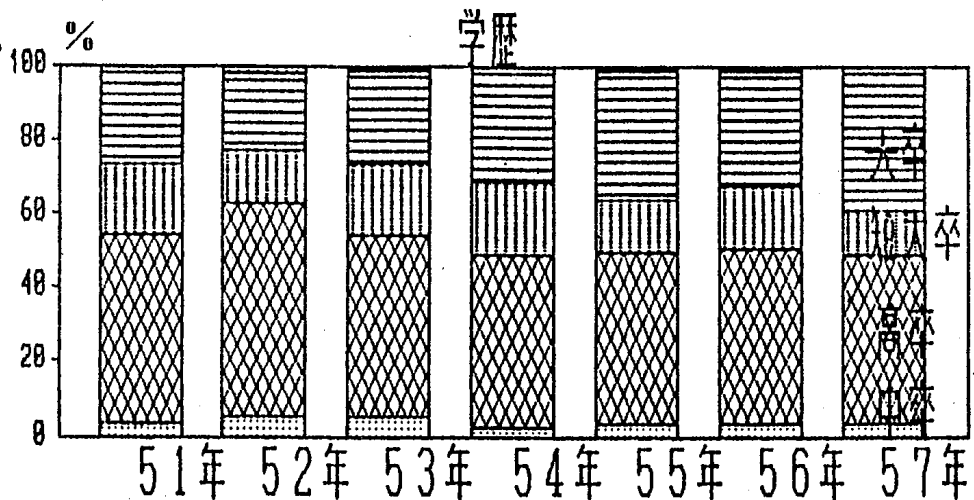
2) 受講生の年齢：中年の受講生が最も多く、自然科学系の講座では若い受講生、地域と関連の深い講座では年長の受講生が多くなる。年長の受講生が増加する傾向がみられる。



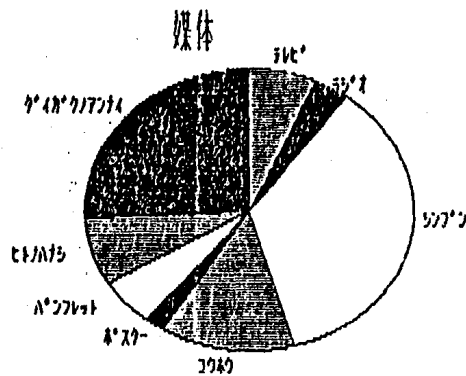
3) 受講生の職業：主婦と会社員が多く、主婦は教養に関するものを、会社員は職業に役立つものをよく受講している。



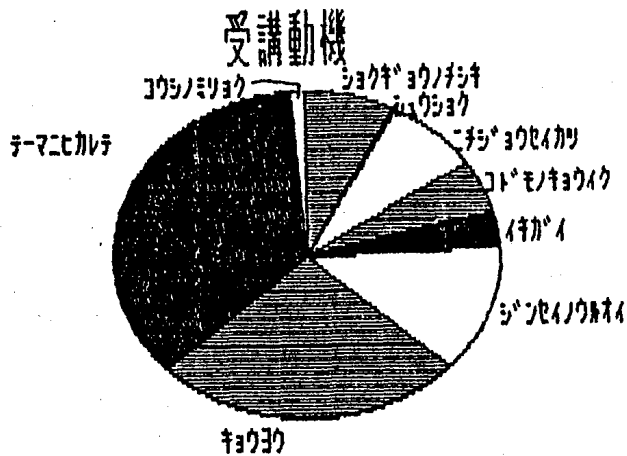
4) 受講生の学歴：高卒以上の受講生が大半を占めており、その中でも高卒が最も多い。



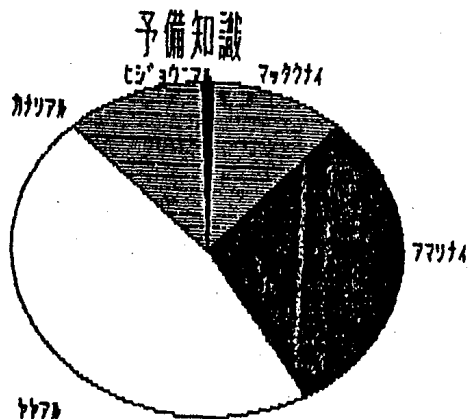
5) 講座を知る媒体：放送公開講座の開催を知らせる手段としては、大学からの案内、新聞記事、市町村の広報が有効である。



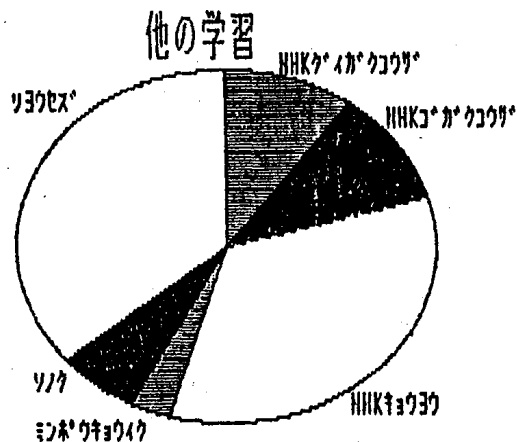
6) 受講動機：受講生は放送公開講座に「教養」を求めている。男性や高学歴は専門的教養や職業上の知識を得たいと思って受講する。



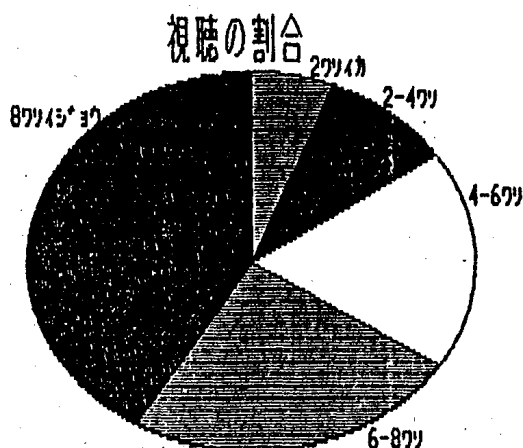
7) 予備知識：受講生は、受講した内容に関連する予備知識を幾分なりとも持っている。



8) 他の学習：受講生の中には、NHKの教養番組や講座番組を継続利用している者が多い。

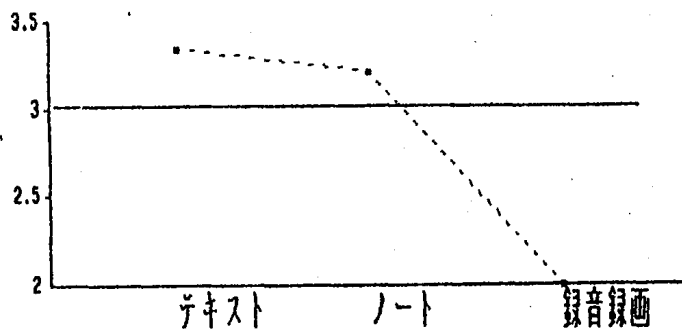


9) 番組視聴：受講生の自己評価では、番組を比較的継続して視聴しているが、回を重ねるごとに視聴率は低下する。



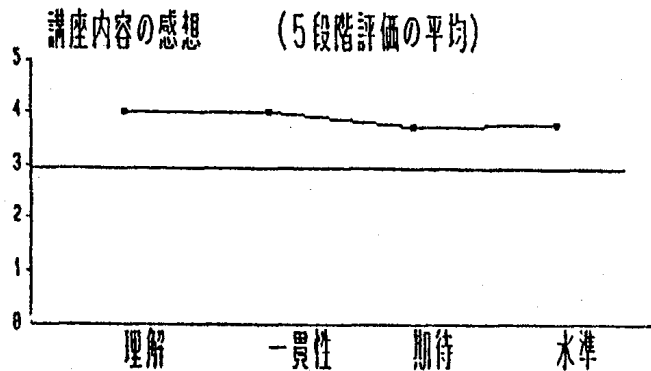
10) 予習やメモ：受講生は、ある程度テキストによる予習をしたり、視聴時にメモやノートをとっている。

学習方法 (5段階の評定・平均)

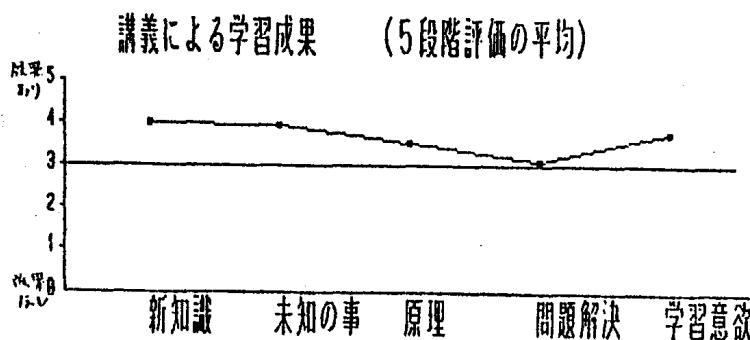


11) 録画と録音：テレビ講座の録画はあまり行なわれていないが、ラジオ講座の録音は2～4割の受講生が行なっている。

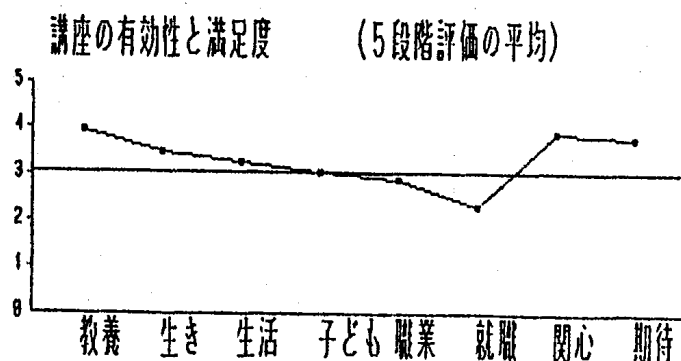
12) 講義内容：講義の内容は概ね好評である。内容は理解しやすく、講義は一貫性をもっており、期待は満たされたと、多くの受講生は思っている。



13) 学習成果：受講生は公開講座による学習成果を高く評価しており、特に新しい知識や未知の問題について成果があったとしている。年長の受講生ほど評価が高い。

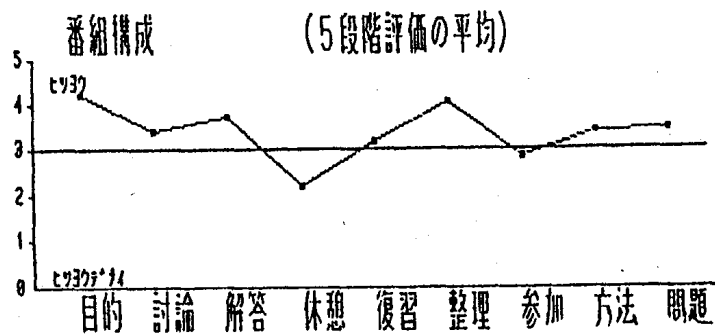


14) 有効性：教養の面で役立ったと思っている受講生が多い。年長の受講生や予備知識の多い受講生ほど、役立ったと思っている。

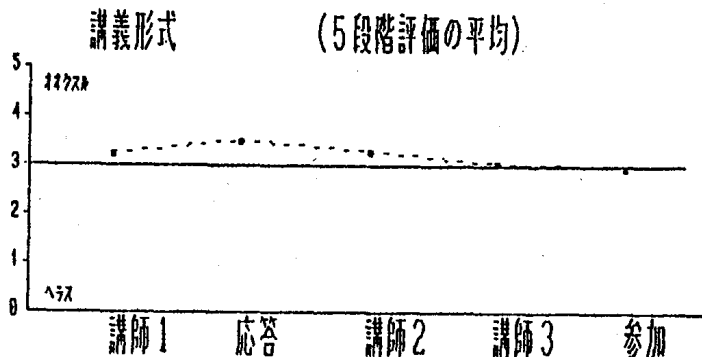


15) 満足度：受講生はだいたい満足している。年長の受講生や予備知識の多い受講生ほど満足度は高い。

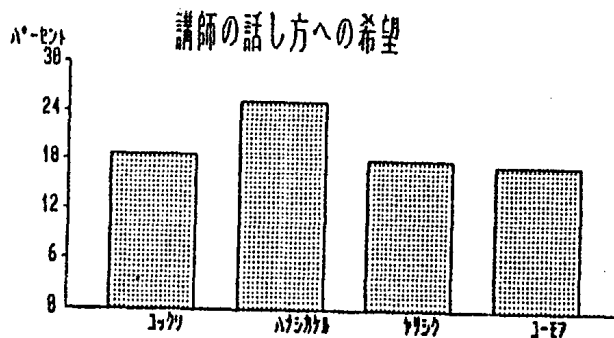
16) 番組構成：出演者の緊張を低下させるために使用されている手法（例、ユーヒー・ブレイクの休憩、視聴者の参加）は、受講生に好評ではない。最も強く望まれていることは、導入部で「ねらい」を説明するとか、最後に「まとめ」をやるとかいった講義内容の整理に関するものである。



17) 講義形式：講義形式を変えてほしいという要望はあまりないが、質問に対する講師の応答を増やしてほしいという要望が少しみられる。予備知識があつたり若い受講生は、講師一人の講義を望んでいる。

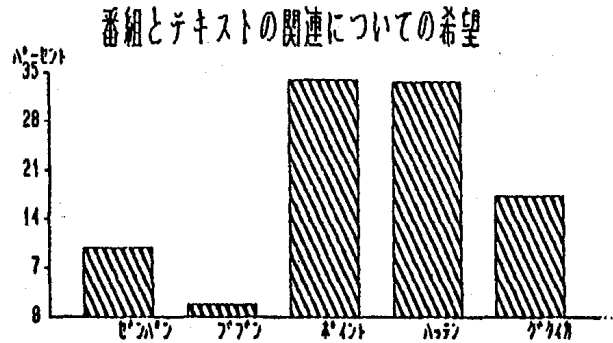


18) 講師の話し方：講師の話し方については、特に強い要望はない。

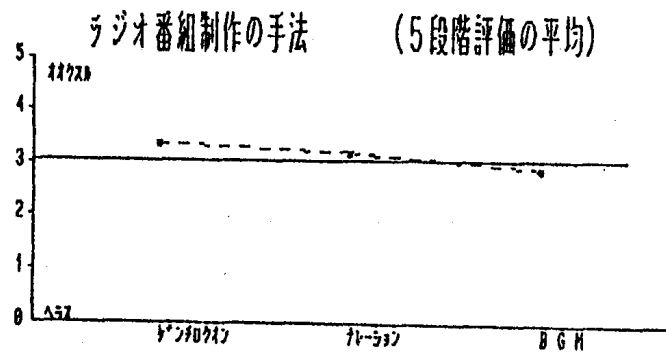
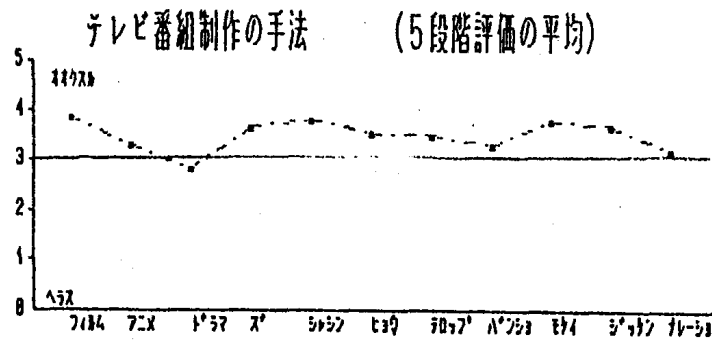




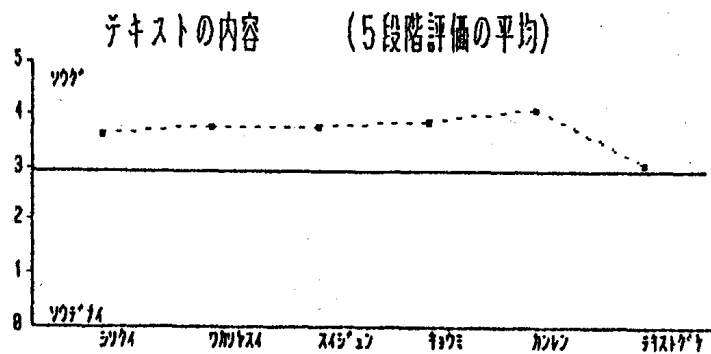
19) 番組とテキストの関連：放送による講義はテキストの解説に終わることなく、テキストの重要部分を説明したものが望まれている。特に、文学や歴史の講座で、テキストの内容を発展させた講義が望まれている。



20) 番組制作の技法：テレビ講座については、内容を目で確認できるような技法を多用することを受講生は望んでいる。ラジオ講座については、強く望まれていることはない。

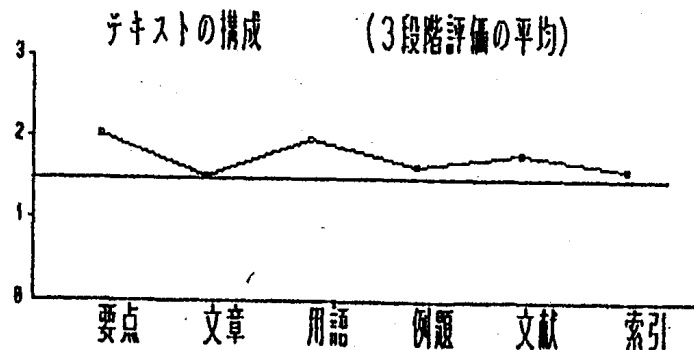


21) テキストの内容：テキストの内容は概ね好評である。年長の受講生の予備知識の多い受講生ほど評価は高い。

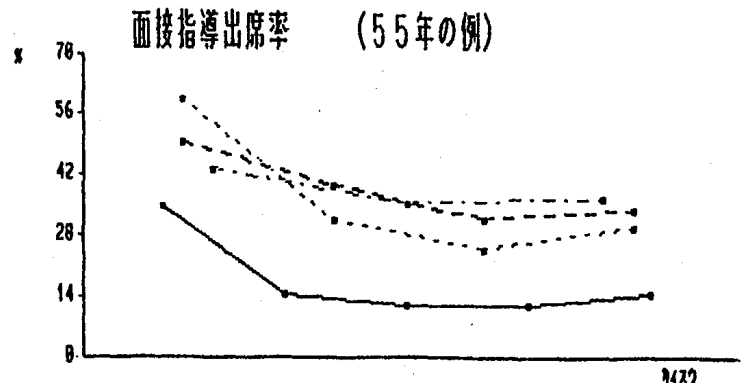


22) テキストと番組との関連：テキストは番組の内容を補助するものであるという意見と、テキストと番組は別のもので自己完結型教材になっていなければならないという意見に別れている。

23) テキストの構成：テキスト改善についての要望は、要点のまとめと専門用語の解説が多い。



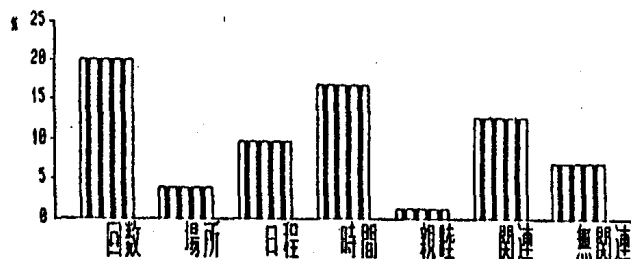
24) スクーリングの出席：スクーリングの出席率は、回を重ねる毎に低下する。開始時間が午前中であると出席率は低下する。年長者の出席率が良い。



25) スクーリングの評価：スクーリングに参加した受講生は、スクーリングの効果があることを認めているが、スクーリングを義務化することについては賛成する受講生は少ない。

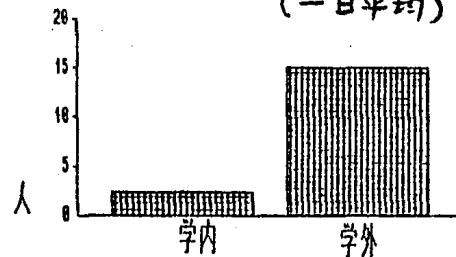
26) スクーリングへの要望：スクーリングに出席できなかった受講生ほど、スクーリングの回数を増やし、開催日を変えてほしいと思っている。スクーリングの様子をテレビで紹介してほしいという要望も出ている。

面接指導への要望



27) 再視聴センターの利用：再視聴センターの利用状況は、センターの解説場所や受入れ体制と関連があるようである。

再視聴センターの利用  
(一日平均)



28) ラジオの放送日時：受講生が希望するラジオの放送講座の放送日時は、日曜日の深夜が最も多い。

29) テレビの放送日時：受講生の希望するテレビ講座の放送日時は、日曜日の早朝か深夜、あるいは平日の午後8時以降である。